The three sections in Position.

The duplicate dentures.

七十一歳ノ高齢女性ニ経験セシ 濾胞性齒牙嚢腫ノ一例 (八表及ビ四圖入)

九州齒科醫學專門學校附屬醫院(院長 沖野教授)
外科部

萩原 俊 勝

Aus der Chirurgischen Abteilung der Zahnärztlichen Hochschule
zu Fukuoka. (Leiter: Prof. Setsuso Okino.)

Ein Fall von Follikularzahnzyste bei einer 71-jährigen Frau.

Von Dr. Toshikatsu Hagihara.

Mit 8 Tabellen und 4 Figuren.

一、緒 言

濾胞性齒牙嚢腫ハ齒牙交換期ノ少年ニ最モ多ク發スル疾患デアルガ、又智齒カラ由來シ

テ屢々青年、壯年者ニテモ現ハル、事ガアル、然シ五十歳以上ノ高齢者ニ現ハル、事ハ寧ロ稀有ナリ、余ハ七十一歳ノ老婆ニ其ノ一例ヲ経験セリ。

其ノ發生機轉ニ就テハ現今尙種々ノ學說多ケレドモ或ハ齒牙濾胞ノ發育障礙ニ依ルモノニテ齒牙疾病トハ無關係ナリトモ云ヒ、或ハ乳齒ノ疾病ニ依ル齒根膜ノ二次的炎症性ノ刺激ニ依ルト言ヒ、又兒童ノ濾胞性齒牙嚢腫ト稱セラル、モノハ壞死セル乳齒ニ起因スル炎症性ノモノナリト言ハレ、又扁桃腺炎及扁桃腺周圍炎モ亦重大ナル原因ヲナスト云フ。

ブローカー氏、マチトー氏等ノ所說タル齒牙發育期ニ於ケル齒牙ノ濾胞及珐瑯器ノ嚢腫變性ニ依ルモノトノ說ガ最モ一般ニ信ジラレテキル、然シナガラ、コノモノハ常ニ埋伏齒ト密接ナル關係ガアリ嚢腫内ニハ殆ド常ニ齒牙又ハ之ト同一ノ組織物ヲ含有シ其ノ位置ノ關係ハ大多數ノ場合齒冠部ヲ嚢腫内ニ向ケ齒根部ヲ骨中ニ植立スルモノナリ。

而シテコノモノ、發生年齡ハ 10 歳ヨリ 20 歳前後ニ最モ多ク認メラル、即チ本症ノ發生ガ主トシテ第二生齒期ニアルト言フ事ニ依リテモ發見率ガ多イコトガ首肯シ得ル、サレド發育緩慢無痛性ナルヲ本症ノ特徴ノ一ツトスル爲初期ニ於テハ患者自身ハ一ツモ氣付カズ相當ノ年月ヲ經過シ嚢腫ノ増大スルニ從ヒ顔面ニ腫張ヲ伴ヒ、或ハ細菌ノ感染ヲ蒙ムリシ爲疼痛ヲ覺エ腫張ノ増大又ハ多量ノ排膿ヲ認ムルニ至リ初メテ氣付ク場合多キ爲現在發表サレ居ル統計モ本症ノ發見率ヲ示スノミニテ實際ノ發生年齡ヲ示セルモノニ非ズト思ハル即チ遠藤氏ノ統計ニヨレバ

10歳乃至19歳	6 例	42.9%	40歳 — 49歳	ナシ	—
20〃 — 29〃	4 〃	28.6〃	50〃 — 59〃	1 例	7.1%
30〃 — 39〃	3 〃	21.4〃	60 歳 以上	ナシ	—

松井氏ノ 38 例ニ依レバ

10 歳 以下	8 例	21.1%	40 歳 以下	4 例	10.5%
20 〃 〃	17 〃	44.7〃	50 〃 〃	2 〃	5.3〃
30 〃 〃	6 〃	15.8〃	60 〃 〃	1 〃	2.6〃

大井、岩澤、小杉氏ノ合計 25 例ニ依レバ

10 歳 以下	3 例	12%	50 歳 以下	2 例	8 %
20 〃 〃	9 〃	36〃	60 〃 〃	1 〃	4 〃
30 〃 〃	5 〃	20〃	70 〃 〃	1 〃	4 〃
40 〃 〃	4 〃	16〃			

以上ノ統計ヲ觀察スルニ何レモ 10 歳乃至 20 歳ガ約半數ヲ占ム、50 歳以上ノ高齢者ハ極メテ稀有ナリ、Kleider 氏ハ 70 歳及ビ 73 歳ノ老人ノ下顎智齒ニ由來セル症例ヲ報告セリ、余ノ經驗セル本症モ亦 71 歳ノ女性ニシテ下顎智齒ニ由來セルモノナリ。

其ノ好發部位ハ上顎犬齒部ニ最モ多ク次ニ下顎智齒部ニ認ムルモノナリ。

遠藤氏ノ 14 例中ニ於テハ上顎 11 例 78.6% 下顎 3 例 21.4% ニシテ部位別ニスレバ、

前 齒 部	7 例	50%
大 臼 齒 部	6 ヲ	42.86%
小 臼 齒 部	1 ヲ	7.14%

松井氏ノ 40 例ニ於テハ上顎 21 例 52.5% 下顎 19 例 47.5 %ニシテ部位別ニスレバ、

前 齒 部	22例	55%
小 臼 齒 部	6 ヲ	15%
大 臼 齒 部	12%	30%

大井、岩澤、小杉氏ノ 25 例ニ於ケル統計ニ依レバ

上	顎	16例	64%	下	顎	9 例	36%
前 齒 部	15%	60%	前 齒 部	ナシ			
臼 齒 部	1 ヲ	4 ヲ	臼 齒 部	9 ヲ	36%		

過剰埋伏齒ニヨルモノノ 9 例 36% ノ中

犬 齒 部	6 例	24%	第 一 大臼齒部	3 ヲ	12%
智 齒 部	5 ヲ	20%	第 二 大臼齒部	2 ヲ	8 %

以上ノ統計ニ依レバ上顎ハ下顎ニ比シテ多發ス、即チ上顎犬齒部最モ多ク、次ニ第三大臼齒、次ニ上下臼齒ノ順位ニシテ下顎前齒部ハ稀有ナリ、左右側ノ比ハ遠藤氏ハ右側ニ松井氏ハ左側ニ多發スト發表セリ、性別ハ一般ニ女性ヨリモ男性ニ多發スト云フ。

二、臨 床 例

患者 東〇ク〇 年齢 71 歳 女性

血族關係ニハ何等特記スベキ事ナシ、患者ノ父ハ約 17 年前老衰ニテ死亡シ、母ハ約 30 年前胃病ニテ他界セリト云フ。

現在患者ハ兄弟二人妹二人ヲ有スルモ皆健在ナリト。

既往症 生來概シテ健康ナレドモ 30 歳頃ヨリ胃疾患ニ冒サレ其ノ後慢性ノ経過ヲトリ五年前ヨリ一年ニ二三回胃痙攣ヲ發ス。

現症既往症 患者ハ昭和五年夏ヨリ左側臼齒部ニ劇痛ヲ覺エ發熱ト共ニ頬部ノ腫脹ヲ來シ、同時ニ牙關緊急ヲ伴ヒタルモ某齒科醫師ニヨリ冷罨法ヲ受ケ約 20 日ニシテ漸次快方ニ向ヒタルモ全治スルニ至ラズ、其ノ後約半ケ年ニシテ昭和六年一月末頃ヨリ再び強度ノ牙關緊急ヲ伴ヒ、外頬部ノ腫脹ヲ來シ遂ニ自潰排膿ヲ見ルニ至リタルヲ以テ 2 月 28 日某外科醫院ニ入院シ、外頬部化膿部ヲ切開シ約 70 日後退院シ、尙其ノ後約一ケ年半通院後處置ヲ受ケタルモ未ダ該部ヨリノ排膿及ビ腫脹並ビニ牙關緊急ノ消退セザルヲ以テ、昭和七年六月九日本校附屬醫院ニ來院診ヲ乞ヘリ。

現症 患者ハ體格中等度ニシテ稍々肥滿シ、一見年齢ニ比シテ元氣ナレド本病ノ永キ経過ノタメ神經過敏トナレリ。

外頬部所見 左側頬部ハ下顎骨隅角部ヨリ觀骨弓部ニ渡リテ瀰蔓性ニ腫脹シ、右側トノ對照性ヲ失ス、殊ニ下顎骨隅角部ハ腫脹甚ダシク、其ノ中央部ニ切開創アリ、切開創ハ一部ハ癰痕形成シテ治癒シ、尙ホ一部ハ暗赤色ノ不良肉芽ヲ生ジ、瘻孔開口シ帶黃白色ノ濃厚ナル膿汁ヲ排膿セリ。(第一圖)

腫脹部ハ壓痛輕度ニシテ一般ニ慢性炎経過ヲトレリ、瘻孔ヨリ消息子ヲ以テ診査スルニ約 3 cm. ノ深部ニ硬固ニシテ粗造ナル骨質ヲ觸レ、然カモ其ノ中央部ニハ移動性骨様硬固物ヲ觸知シ、術者ハ腐骨片カ、埋伏齒カヲ疑ヘリ。

口腔内所見 齒牙ハ $\frac{6. 2. 1. | 1. 2. 3. 4. 6. 7.}{3. 2. 1. | 1. 2. 3.}$ ヲ有シ $\frac{6. | 6. 7.}{2. 1. | 1. 2.}$ ハ稍々骨植堅固

第一圖
手術前患者ノ外頬部所見

ニシテ $\frac{3}{3}$ ハ挺出動搖セリ $\frac{2. 1. | 1. 2. 3. 4.}{6. 7.}$ ハ常ニ異和ノ感アリト、下顎隅角部ニ腫脹ト共ニ壓痛アリ、約一横指程度ノ牙關緊急アリ、其ノ他大シタル異狀ヲ認メズ。

X線所見 消息子ヲ挿入X線診査ヲナシタルニ上行枝ニ移行スル、下顎隅角部ノ稍々上方下顎骨ノ中央部ニ齒冠部ヲ下方ニ向ケ骨内空腔中ニ $\frac{8}{8}$ ノ存スルヲ發見ス、消息子モ亦明カニ齒牙ニ接觸ス。

(第二圖)

前記ノ所見ニヨツテ本症ハ智齒ニ基因スル瀰胞性齒牙囊腫ト診斷ス、同腫瘍ガ發育シ外側骨壁ヲ破リ、之レニ感染ヲ起シ化膿性骨膜炎及ビ蜂窠織炎ヲ併發経過セルモノト思考ス。

處置 六月十二日入院外頰部ヨリ切開シ瘻孔ヲ傳ヒテ骨ニ達シ深サ約 5. cm ノ部位ニテ一個ノ齒牙ヲ發見ス、該齒牙ハ咬合面ヲ破壊骨壁ヨリ露出シ居レリ、齒牙ノ摘出後囊腫壁ノ摘出ヲ行ヒ充分ナル搔爬ノ後タンポンヲナシ手術ヲ終ル、後出血及ビ疼痛ナク、手術後ハ毎日リザアノール液ニテ洗滌シタンポン交換ヲ行ヒ、手術後九日目頃ヨリ牙關緊急及腫脹漸次減退セリ、20 日ニシテ退院シ其後三週間ノ通院處置ニテ全治セリ（第四圖及ビ第五圖）。

三、總 括

本症ハ智齒カラ由來シタ瀰胞性齒牙囊腫ナレド經過中ニ化膿性炎症ヲ併發セシタメニ齒牙ニ關係ナキ化膿性骨膜炎及ビ蜂窠織炎ト誤認サレシ一例デアル、瀰胞性齒牙囊腫トシテモ本例ノ如キ高齢者ニ現ハル、ハ寧ロ臨床上稀有ニ屬ス。

第 二 圖

X線ニヨル囊腫及ビ齒牙の埋伏位置

第 三 圖
摘 出 セ シ 齒 牙

第 四 圖
手 術 後 X 線 所 見